

平成21年 6 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19520208
 研究課題名（和文）古代ギリシア演劇における演劇構造と本文校訂の研究
 研究課題名（英文）Composition and Textual Problems in Ancient Greek Drama

研究代表者
 野津 寛 (NOTSU HIROSHI)
 信州大学・人文学部・准教授
 研究者番号：20402092

研究成果の概要：

古代ギリシア喜劇の構造を理解するにあたり、(1) ictus という共通単位によって「歌われた部分」も「それ以外の部分」も量的に計測出来ること、(2) またそれぞれ 24 ictus, 32 ictus, 36 ictus という長さを持つ3種類の module を想定することで演劇テキストの諸部分と諸部分の関係、すなわち量的な構造の全体と詳細が明らかになるという基本的な仮説は、少なくともアリストパネースの『アカルナイの人々』と『鳥』に関してはかなり満足の行く結果を得られた。しかし、それ以外の作品に関しては、残念ながら、未だ満足の行く結果を得られていない。最初の前提、すなわち「24 ictus, 32 ictus, 36 ictus」という3モジュールに限定して仮説を構築したこと自体に問題があったかもしれないので、引き続き、その他のモジュールの可能性を考慮した上で、より柔軟性のある仮説を設定し、それに対する検証を続けるべきであるという結論を得るに至った。

交付額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2007年度 | 1,800,000 | 540,000 | 2,340,000 |
| 2008年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,300,000 | 690,000 | 2,990,000 |

研究分野：西洋古典

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：古代ギリシア喜劇, 韻律, 古代ギリシア文学

1. 研究開始当初の背景

私は博士学位論文において、古代ギリシア喜劇の韻律という量的な構造を理解するにあたり、(1) ictus という共通の単位によって「歌われた部分」も「それ以外の部分」も同様の方法によって量的に計測出来ること、(2) またそれぞれ 24 ictus, 32 ictus, 36 ictus という長さを持つ3種類の module を想定することによって、演劇テキストの諸部分と諸部分の関係、すなわち量的な構造の全体と詳細が明らかになる場合がかなりあることを示した。

特にアリストパネースの2作品において顕著に認識されたこの法則性は、アリストパネースのその他の作品の構造においても、さらには、同時代の悲劇作品の構造においても、また、演劇テキスト以外の古代ギリシア韻文作品の構造一般においても、確認されるかもしれないと考えた。それゆえ、こうした法則性の有無について古代ギリシア韻文作品全体に関する量的な分析の新たな方法の確立を射程に入れながら、まずはアリストパネースのその他の作品の構造について、次いで（機会が与えられるならば）同時代の悲劇作品の構造においても詳しく同様の検討を行う研究を計画した。

2. 研究の目的

古代ギリシア喜劇作品（特にアリストパネースの喜劇作品）において特徴的な形で見いだされる「構造」、すなわち、その「構造」を支配する諸形式と規則性に関する研究の歴史は、本格的なものとしては19世紀ドイツの諸研究にまで遡ることが出来る。これら

諸形式と規則性に関する研究は、当初より（狭義の）韻律研究の延長線上にあるものと考えられ、本文校訂という文献学の根本問題と不可分の問題として追及されてきた。古代ギリシア喜劇作品の構造に関する学問的な（すなわち法則確定によって定式化さる）認識が、テキスト伝承の歴史的批判を可能にする重要な規範要因であると考えられていたためである。

反面、19世紀の学者の飽くなき法則追求の熱意のため、発見された諸法則に適合しない伝承部分がしばしば「改ざん」の結果とさえ看做される結果になったことも認めなければならない。この法則性追求の「行き過ぎ」に対する反省もあって、現代の研究者たちの間では、アリストパネースに代表される古代ギリシア喜劇作品の「構造」は、確かに特徴的ではあるけれど、実際には「多様である」という常識的な結論に落ち着き、19世紀以来の問題設定、即ち「喜劇の構造」と「本文校訂」との本質的な繋がりへの認識に対する関心は弱まっているとも言える。

現代においては、古代ギリシア喜劇の構造に注目する学者たちの主要な関心は、どちらかと言えば「物語の構造分析」のような比較的ルーズな、すなわち、数量的に定義不可能な、文学的・神話学的な認識の領域に移っていると言うことが出来る。他方、韻律法則そのものに関する研究と認識は、19世紀から現代にかけて、更なる深化を遂げていることも事実であり、演劇作品の細部の本文確定に対して規範的な地位を弱めてははいないように思われる。

しかし、韻律学の成果は一行の内部、相互に対応(responsio)する歌の部分などにおいて、局所的に適用されているに留まり、一個

の演劇作品全体の構造を律する原理とは必ずしも看做されてはおらず、かつて演劇構造形式と諸法則の研究が「韻律研究の延長として」確立しようとした認識の領域は放棄されてしまったか、あるいは、それ自身を自己目的として行われる審美的な研究の領域に過ぎないかのごとく看做されているのが現状である。

このような一般的な傾向に反して、すなわち、本文校訂とテキストの伝承史を研究する現代の学者たちの一部において、演劇構造の研究をあくまでも韻律研究の延長線上に位置づけ、演劇構造の研究と本文校訂の間に存する本質的な連関を見据えた研究を続けている研究者の例があった。そのような研究を行っている学者の一人が、(先頃 86 歳で亡くなられた) フランスの Jean Irigoien 博士であった。本研究は、この Irigoien 博士の研究方法を、特に「ictus」という計測単位を直接に学び取り、それを発展させることを目指すものであった。

本研究は、大雑把に言えば、研究代表者がすでにフランスにおいて博士学位論文として提出し受理された予備的研究を一步進めることを目指すものである。研究対象を新たに全ての古代ギリシア喜劇作品の諸部分に広げると共に、演劇構造の計測法と形式と諸規則に関する仮説を検証し、喜劇作品のみならず(ある程度)悲劇作品においても、同様の研究と検証を行い、認識の深化に成功すれば、仮説の適用範囲を古代ギリシア韻文文学全体の領域に拡大することができるものと考えた。

3. 研究の方法

(1) ictus という共通の計測単位によって「歌われた部分」も「それ以外の部分」も同

様の方法によって量的に計測出来ること、(2) またそれぞれ 24 ictus, 32 ictus, 36 ictus という長さを持つ 3 種類の module を想定することで、演劇テキストの諸部分と諸部分の関係、すなわち量的な構造の全体と詳細が明らかになるという本研究の基本仮説を、先ずは、アリストパネースの初期作品を通じて検証し、特に『アカルナイの人々』と『鳥』に関して再検証を行うと共に、アリストパネースのその他の作品の構造においても順次詳しく同様の検討を行った。

こうした法則性の存在がアリストパネースの作品全体において一般的に確認されるならば、現代の研究者たちがあたかも避けているかのように見える、「韻律研究の延長線上にあるべき演劇構造の研究」という、かつての前提を復活させることが出来るだろうという想定のもとに、個々の作品の量的構造を詳細に分析した。そのような前提が復活するならば、この量的な法則性の認識に照らして、もう一度古代ギリシア喜劇・悲劇の作品伝承において、近年の本文校訂の成果を検証することが可能になるという証拠を求めて調査を続けた。上記『アカルナイの人々』と『鳥』に関して確立された(と私が考える)計測と分析の方法をその他の諸作品の全体に適用出来るかどうかの検証に多くの時間が費やされた。

4. 研究成果

本研究における主要な仮説、すなわち、(1) ictus という共通単位によって「歌われた部分」も「それ以外の部分」も量的に計測出来ること、(2) また、それぞれ 24 ictus, 32 ictus, 36 ictus という長さを有する 3 種類の module を想定することで、演劇テ

キストの諸部分と諸部分の関係, すなわち, 量的な構造の全体と詳細が明らかになるという仮説は, 少なくともアリストパネースの『アカルナイの人々』と『鳥』に関しては, かなり満足の行く結果を得られたので, この点についてはその一部を研究発表(下記参照)として公開することができた. しかし, それ以外の作品に関しては, 未だ満足の行く結果を得られず, 分析途上の段階に留まっている. そのため, これらの作品については未だ研究発表という形で公開するには至って居ない.

最初の前提, すなわち「24 ictus, 32 ictus, 36 ictus」という3モジュールに限定したことそのものに問題があった可能性を考慮に入れながら, 引き続き, その他のモジュールを想定する可能性を仮説に加えることによって, 仮説そのものに柔軟性を加えつつ分析と検証を続けるべきであるという結論を得るに至った.

なお, 『ギリシア喜劇全集 < 別巻 > ギリシア喜劇案内』に, 上記 ictus による分析の方法を日本語で解説する論考を発表した.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

① Hiroshi NOTSU, Parodos I (204-283) des Acharniens, 『人文科学論集 文化コミュニケーション学科編』第42号(2008年), p. 35-49. 査読有り

〔図書〕(計 2 件)

① 『ギリシア喜劇全集 < 1 >』(〔編集者:〕久保田忠利, 中務哲郎, [執筆者:]野津寛, 平田松吾, 橋本隆夫訳), 岩波書, 2008年. 総頁 378 + 34. 内 p. 1-104, p. 323-342 を執筆.

② 『ギリシア喜劇全集 < 別巻 > ギリシア喜劇案内』(〔編集者:〕久保田忠利, 中務哲郎, [執筆者:]丹下和彦, 久保田忠利, 中務哲郎, 橋本隆夫, 野津寛, 安村典子, 平田松吾, 木村健治, マルティン・チエシュコ, 西村賀子, 佐野好則), 岩波書店, 2008年. 総頁 3358 + 24. 内 p. 193-222 を執筆.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野津 寛 (氏名 NOTSU Hiroshi)
信州大学・人文学部・准教授
研究者番号: 20402092

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者